

カムパネルラ

～カムパネルラとは～
宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』でジョバンニと旅をする友人なのは言うまでもありません。絵本が開く異世界への道案内人としての意味を込めたものです。

Vol.8

2009年1月号

- 忘れられない遊び、そして友だち・・・・・・・・・・・・・・出口 竜作
- 絵本のなかに降る雪は・・・・・・・・・・・・・・藤田 博
- 幼児と大学生に読み聞かせする絵本・・・・・・・・・・・・・・荒明 聖
- 優しい気持ちになれるこの一冊・・・・・・・・・・・・・・鈴木 友絵
- 新刊紹介・・・・・・・・・・・・・・藤田 博

■ 忘れられない遊び、そして友だち

出口 竜作

この絵本と出会ったのは、まったくの偶然でした。宮教大に赴任する前、愛知県岡崎市に住んでいた頃のことです。まだ小さかった長男は、名鉄（名古屋鉄道）の電車が大好きでした。名鉄の車両は赤い色をしています。赤い色がぬられたおもちゃの電車—チビ電—で遊ぶ、楽しそうな子どもたち・・・この表紙が長男向けの絵本を探していた妻の目にとまり、『はしれ！チビ電』は我が家にやってくることになったのでした。



公園でゴロゴロしているユウキとサトシとカズ。そこに、ユウキの弟のモトキが、ゴミ捨て場からもらってきた台車を引っぱりながら現れます。ユウキの発案で、4人はこの台車とダンボールを使って電車を作ることになりました。ダイちゃんとタクヤとマイちゃんも加わって、電車作りのメンバーは7人に増えます。みんなが次々にアイデアを出し、パンタグラフ、バンパー、窓、ドア、ライトなど、いろいろな部分が作られていきます。最後に赤い色を全体にぬって、チビ電という名前をつけて完成。みんなは飛び上がって喜びました！

そんな時、サトシが転校してしまうことを知らされます。みんながしょんぼりとしてしまう中、タクヤの思いつきから、チビ電で町の中心部に出かけることになりました。チビ電に乗る人、引っぱる人、押す人、7人は交代で町中を走り回りました。

鉄道ガード下をくぐる時は迫力満点。チビ電はものすごい勢いで急な坂道を下っていきます。「さいごは サトシのれよ」「あー いつまでも、こうして ずーっと ずーっと あそんでいたいよなー」・・・夕日の中の帰り道、それぞれの思いを胸に、子どもたちはチビ電とともに家へと戻って行くのでした。

1997年に第1刷の出た『はしれ！チビ電』は、「昔話」というカテゴリーには入りません。それなのに、この絵本を読むたびに、何ともなつかしい気持ちがしてくるのです。どこにでもある都会の風景。子どもたちのいきいきとした表情。集団での遊び。少々やんちゃな試み。転校していく友だちへの思いやり。これらすべてが、自分自身の子どもの頃の遊びや友だちの記憶と重なり合って、なつかしさを感じるのだと思います。あの頃、子どもたちだけで行って遊んだ池や川や海、山や森、廃屋や線路・・・楽しかったなあ。

テレビゲームでばかり遊んでいる子どもを見るたびに、もっと自由な発想で、もっと自由な遊びをしてもらいたいと思うのですが、今の学校・社会にはさまざまな規制があり、子どもだけで行ってはならない場所、やってはならない遊びばかりです。好きなところに行って自由に遊べるのは、テレビゲームの中の世界だけなのかもしれません。このように遊んだ子どもが大人になった時、どのような遊びや友だちが記憶に残るのでしょうか・・・？教員養成大学のスタッフとして、そして小学生の子どもをもつ親として、これから先生となり親となるみなさんには、『はしれ！チビ電』を是非一度読んでもらいたいと思うのです。

※「はしれ！チビ電」もろはしせいこう・作／童心社

(理科教育講座)

雪は積もるもの、積み重なるもの、それが時の流れを目に見える形で教えてくれます。『仮名手本忠臣蔵』の十一段「討入」の場面に雪が欠かせないのも、いかに長い艱難辛苦の時間を過ごしたかを雪によって示すことができるからに違いありません。同時にその雪は、主君のために自分を捨てる、犠牲の精神の象徴ともなっているのです。

G. エリオット『サイラス・マーナー』（岩波文庫）における雪は、人間嫌いを通してきたサイラスが、よちよち歩きの赤ちゃんエピーとの出会いをつくり出すものとなっています。出会いのその日は大晦日です。旧い年に別れを告げ、新しい年を迎える大晦日を境にサイラスは変わっていく。旧いサイラスを捨て、新しいサイラスを迎え入れる、それが雪の大晦日なのです。



大晦日の物語に、瀬田貞二・再話／赤羽末吉・絵『かさじぞう』（福音館書店）があります。自分の作った五つのかさを持っていざさんが町に売りにいきます。お正月のもちを買うためです。売れずに残ってしまったそのかさを六地蔵にかぶせます。しかし、一つ足りません。じいさんは自分のかさをとってかぶせてやるのです。その夜、もちやら魚やらが山ほど届けられるのは、自分より相手を考える、その心に対してなのです。

「あと隠しの雪」の伝説が思い出されます。身をやつした弘法大師が貧しいおばあさんの家に一夜の宿を乞います。もてなすものが何もないおばあさんは、となりの家から稲一把を盗み、団子をつくって食べさせます。おばあさんの足跡から盗んだことがわかってしまうと考えた弘法大師は、雪を降らせ、足跡を隠すのです。雪は盗みを隠しているわけではありません。盗みをしてももてなしを考えたおばあさんの心を浮かび上がらせているのです。

中川正文・文／梶山俊夫・絵『ごろはちだいみょうじん』（福音館書店）の主役はたぬきのごろはち、いつもわるさばかり、それでいてにくめないごろはちです。ある日のこと、村に花火があがります。汽車の開通を祝う花火です。汽車がやってきます。「なんや、けむり はいとるで。へんてこりんな もんやのう。」汽車を見たことのない村人はそろそろ線路に入り、歩き出します。「ひょっとしたら、こら ごろはちに だまされとるのと ちがうやろか」、村人はそう考えたのです。走ってくる汽車の前に立ちはだかり、汽車を止めることでごろはちは村人の命を救います。死んだごろはちの上に雪が降ってきます。「つめとうなった ごろはちの うえに、ぼたんゆきが ぼたぼたと ふりはじめて きよった。」雪は、自ら命を投げ出したいたずらもののごろはちの清い心を表しているのです。



「ゆきが たくさん ふって、のも やまも すっかり まっしろに になりました。」こうさが かぶを二つ、雪の上に見つけます。方 軼羣・作／村山知義・絵『しんせつなともだち』（福音館書店）の始まりです。一つ食べたこうさは残りの一つをろばのところに持っていきます。「ろばさんは、きっと たべものが ないでしょう。」と考えたのです。さつまいもを見つけたろばが家に戻ってみると、かぶが置いてあります。ろばはこやぎのところに かぶを持っていきます。はくさいを見つけたこやぎが家に戻ってみると、かぶが置いてあります。こやぎはこじかのところに かぶを持っていきます。あおなを見つけたこ

じかが家に戻ってみると、かぶが置いてあります。こじかはこうさぎのところに かぶを持っていきます。「やあ、かぶがもどってきた。」

明日、食べ物が見つかる保障はどこにもありません。かぶを自分のものにしたい、そう考えて当然です。しかし、こうさぎもろばもこやぎもこじかもそうはしないのです。雪の上にかぶが、さつまいもが、はくさいが、あおなが落ちているのはいかにも不自然です。高いところから神が見ていて、試しているとは考えられないでしょうか。そうだとすれば、こうさぎもろばもこやぎもこじかもその試しに見事に応えたことになるのです。戻ってきたのはかぶだけでない、こうさぎ、ろば、こやぎ、こじかの心なのです。

※「かさじぞう」瀬田貞二・再話／赤羽末吉・絵／福音館書店

※「ごろはちだいみょうじん」中川正文・文／梶山俊夫・絵／福音館書店

※「しんせつなともだち」方 軼羣・作／村山知義・絵／福音館書店

（英語教育講座）

■ 幼児と大学生に読み聞かせする絵本

荒明 聖

みなさんは幼児に読み聞かせをすることは容易に思い浮かべるでしょうが、大学生に読み聞かせ？と思うでしょうね。私が担当している生活科教材研究法では、小学校低学年＜1・2年生＞の生活科という教科の特質について、幼児向けの絵本『はなを くんくん』を読み聞かせしながら講義・演習を行っています。もちろん、保育者として幼児の前に立った際にも、冬から春にかけての季節ものとして『はなを くんくん』の読み聞かせを行ってきました。



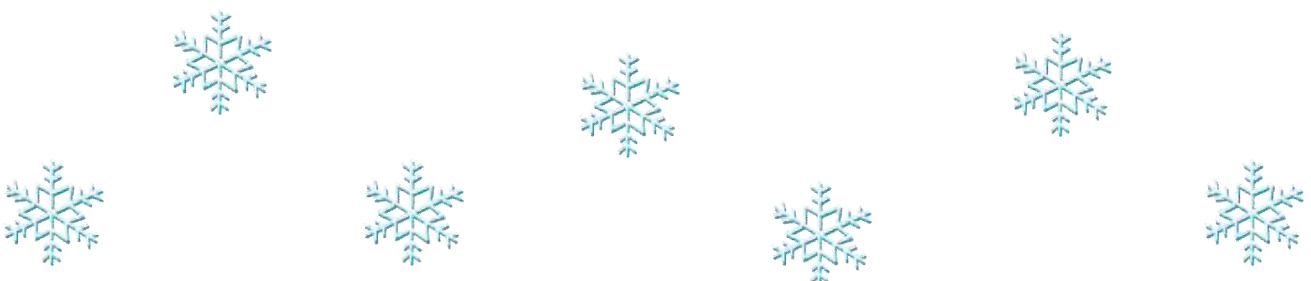
『はなを くんくん』は、名前のとおり、生き物が嗅覚を働かせて目標物に向かっていくという話です。場所は春間近の雪山。野ネズミ、クマ、カタツムリ、リス、ヤマネズミが冬眠から覚め、春の気配を感じて目標物に向かって走り出すという内容です。大勢の生き物たちが走り出したその先にあったもの、それは、雪の中に咲く花一輪。その花の周りで踊り喜ぶ生き物たちの表情とともに、たった一輪の花を囲んで集まる生き物たちの姿勢が印象的な一冊です。

『はなを くんくん』の特徴は、その体裁にあります。黄色い外装の中に現れるモノクロだけのページ。冬、そして雪山という白黒だけの情景に唯一描かれているエンディングの3色ページ。それは、雪山の白、生き物の黒、その中に現れる黄色い一輪の花です。色もストーリーも実に単純です。単調です。しかし、そのことが『はなを くんくん』を際立たせています。私は、このことがとりわけ気に入っており、幼児にも大学生にも感じ取らせたい部分です。

生活科の授業は、この絵本のように子どもにとって身近で単純な世界（対象としての人人、社会、自然）が学習活動のエリアです。学習方法も子どもたち自らの手で考えて試し、試しては考えて活動していきます。今どきの大学生が子どもたちに受けてこない教科、出始めのころの社会科＋理科÷2の教科ではない、ホンモノの生活科を伝えるうえでも、大学の講義・演習で活用しているのです。幼児と同じように、まばたきを惜しんで見入っている大学生の姿も見物ですよ。そんな絵本が『はなを くんくん』です。

※「はなを くんくん」ルース・クラウス・作／マーク・シーモント・絵／木島 始・訳／福音館書店

(宮城教育大学併任講師 附属小学校主幹教諭)



■ 優しい気持ちになれるこの一冊

新美南吉・作／黒井 健・絵『手ぶくろを買いに』（偕成社）

鈴木 友絵

きつねと聞くと、「人を化かし、騙す」「ずるがしこい」などといったイメージが思い浮かびます。こうした印象に基づいて作られ、人間ときつねの確執を扱った作品は少なくありません。このせいか、きつねは悪者のイメージが強く、幼少時の私にとって好ましい動物ではありませんでした。しかし、このイメージを払拭してくれる、優しい気持ちになれる作品があります。それが新美南吉『手ぶくろを買いに』です。



寒い冬の朝、母さんぎつねは子ぎつねに毛糸の手袋を買ってやろうと思いつきます。しかし、夜、町へ出かける途中、母さんぎつねは人間に追い立てられたことを思い出し、足が止まってしまいます。そこで、子ぎつねの片手を人間の子どもの手に変えます。町の帽子屋へ行って戸を開けてもらうこと、その戸の隙間から手を差し入れ、この手に合った手袋をちょうだいと言わせることにするのです。人間は恐ろしいものなのだということを言い聞かせ、子ぎつねをひとりで町に行かせます。にもかかわらず、子ぎつねは、間違っ言われた方の手ではなく、きつねの手を帽子屋に見せてしまいます。帽子屋は子ぎつねに手袋を渡してくれたでしょうか。

帽子屋が、子ぎつねの持ってきた白銅貨が木の葉でなく、本物のお金かどうかを試す様子、母さんぎつねが子ぎつねの話を聞いて、「ほんとうに人間はいいものかしら。ほんとうに人間はいいものかしら。」と繰り返しつつやく様子など、人間ときつねが信用し切ることのできない様子は描かれています。しかし、きつねと人間の二つの世界を隔てているものは、子ぎつねの無邪気さ、愛らしさによって、揺れています。子ぎつねが人間の親子を見て母さんぎつねが恋しくなるところを読むと、親が子を、子が親を想う気持ちに違いなどないのだと考えさせられるのです。

(学校教育専攻3年)

■ 新刊紹介

市川宣子・作／柿本幸造・絵『さいしゅうれっしゃのあとで』（ひさかたチャイルド）

峠にある駅長さん一人の小さな駅の話です。「あきの おわりの よるでした」、その日の最終列車を見送った駅長さんは、「やれやれ、こんやは とくべつ ひえるわい。」と熱いコーヒーを飲もうとします。そこに列車がやって来る音が聞こえてきます。「かたた、かたた…」「おかしいな、さいしゅうれっしゃが でた あとなのに。」運転席に座っていたのは男の子でした。駅長さんの問い掛けに男の子は答えます、「ふもとの まちまで おおいそぎ、ふゆを とどけにいくんだよ。…かえりは はるだよ、えきちょうさん。はるかぜを のせてくるんだよ。」

「きをつけて いくんだぞう。」男の子の木枯らしの列車を見送った駅長さんが、「さて、あついやつをいっぱい…」、コーヒーを飲み直そうと思ったそのとき、また別の列車がやって来る音が聞こえてきます。「かたた、かたた…」今度は粉雪を届けに行く女の子が乗っていました。「かえりははるよ、えきちょうさあん。れんげの… はなを… のせて… くるのよう。」駅長さんが声を掛けます、「きを、つけて、いく、んだ、ぞう。」

その後にもたまたま列車がやって来ます。今度はゆきだるまが一杯です。「まあ いいや。どうせ ふもとの まちに いくんだらう。かえりは はるに なるのかね。」解けてしまう雪だるまに帰りはありません。雪だるまがあげる「む、む、む。」の声がそれを伝えているのです。

木枯らしに粉雪に雪だるま、冷たいものばかりです。駅長さんのコーヒーもすっかりさめてしまっています。それでいてあたたかさを感じるのはなぜでしょうか。冬は駅のある峠からふもとの町へと降りていきます。その冬を送り出す駅長さんは、遅い春を迎える駅長さんでもあるのです。「あさ いちばんの しはつれっしゃから よる さいごの さいしゅうれっしゃまで、じかんどおりに はしるよう、…きをつけています。」冬と春と、駅長さんの振るカンテラの向きこそ違え、季節が正確に巡っていくようにすることも駅長さんの仕事のひとつなのかもしれません。



(藤田 博)

発行：宮城教育大学附属図書館